

環境問題ヤブニラミ

島津 龍男

今回は、環境問題について日頃考えていることを思いつくままに、勝手な切り口から書いてみる。

<資源枯渇問題>

「埋蔵量」：資源には、1) 枯渇性と 2) 非枯渇性とがある。1) は「ある一定期間内に一定品位の埋蔵量・賦存量（人間が利用可能な量として「潜在賦存量」・当然考慮すべき地理的条件等を考慮して「最大可採量」・利用技術等の制約要因も考慮して開発利用の可能性が期待される「利用可能量」を三段階に分ける。1) の資源が開発とともに非可逆的に減少・枯渇していく資源を指し、鉱物資源・鉱物燃料がこの範疇に属す。2) は一定期間内に再生可能な資源を指し、森林・水・動植物類の多くがこの分類に入る。「確認埋蔵量」を「年生産量」で除した数値 (R/P) を「可採年数」と呼ぶ。ここで、可採年数が経過したとき、資源が枯渇していることを意味するものではないことに注意する。それは、「確認埋蔵量」が、資源価格・探査の経済性・既存油田の見直し・低品位鉱採掘の採算性向上の理由によって、増大するからである。その他に技術革新・技術水準の影響もある。

要は、「資源枯渇」と「埋蔵量」とは単純な反比例関係にあると考えるのは早計で、「埋蔵量」が技術的・経済的・政治的にどのような影響を受けているかを承知して、判断を誤らないことが重要である。この判断結果が、将来に向けた開発・改善・向上の起点・動機付けになるのである。

すなわち、「成長の限界」を踏まえ「持続可能な発展」にたゆまぬ努力を続けることが、我々人類に与えられた「地球環境保全問題」解決への使命であるといえる。

<エネルギー>

「クール（ウオーム）ビズ」「温室効果ガス」「オイルショック」と、時代背景によって変わるものの、我々日本人にとって「省エネ」は、重要課題の一つである。政治・経済・生活、どの分野においてもなおざりに出来ない重大事である。

ここで私事であるが、横浜鶴見から同南区(見晴らし・風通しの良い丘の上)に引っ越してきてから約一年半過ぎた。昨年・今年と夏場に「クーラー」を殆ど使っていない。なんと「心地よい風が入ってくる」のである。直射日光さえ遮れば、「避暑地はかくありなん」という気分である。当然「電気代」が安上がりと思っていたら、あにはからんや落とし穴があったのである。「冷蔵庫」がフル稼働していたのである。老人夫婦が使っていた冷蔵庫を捨てて、同居した息子家族（100kg 近い体重の息子と食べ盛り的高中生男子と嫁の四人）が持ってきた大型冷蔵庫には、大量の売り出し安値食料品と PET ボトル入りの清涼飲料水がぎっしり詰まっていたのである。

風が止まると、外からの熱気に加えて冷蔵庫の背面からの廃熱も室温を上げてくれる。まさに電気代と熱気のダブルパンチである。屋内で「水をまく」わけにもいかない。やはり「クーラー」のお世話にならなければいけないのだろうか。いいえ、当家ではじっと我慢して「風」を待つのである。(生活の知恵？やせ我慢？)

このように、「自然の恵み」はそのまま「恩恵」として「生活を潤す」働きをするが、「文明」から得た「科学技術による進化の恵み」は無条件ではいただけない。気をつけないと、「人類にとって弊害」を及ぼす。「物理学」が支配するこの世では、「決して熱力学の第二法則を忘れてはいけない」ということを実感している今日この頃である。